麻生区区民会議　第４回　市民活動・地域活動の活性化部会 議事要旨

１　開催日時：平成２７年３月１７日（火）午後３時００分～午後４時５５分

２　開催場所：麻生区役所第１会議室

３　出席者：［専門部会委員］
岡倉委員、高橋委員、石井委員、石川委員、植木委員、小尾委員、髙倉委員、林委員、宮本委員
（欠席）横田委員
［事務局］　鈴木企画課長、白石、麻生　［コンサルタント］　中島

４　傍聴者　　０名

５　連絡事項

（1）第4回企画部会の報告
企画部会において全体テーマを検討していることを説明。委員から「人、心がかよう、ゆめ、地域づくり」などをキーワードとすることが提案された。企画部会における全体テーマの審議に際して、参考にするよう報告することとした。

（2）ふれあいネットの利用（委員からの質問事項）
事務局が「ふれあいネット」に関して、団体登録の要件を中心に説明。

（3）前回会議の振り返り
前回の会議についてコンサルタントより説明。地縁と知縁の連携の必要性、具体的に市民活動団体と地域の町内会・自治会がお互いに心を通わせる、同じ気持ちになって地域の課題解決に取り組んでいく必要性について意見交換を行った。

６　議　事

・最優先テーマの「ボランティア活動の活性化」について意見交換を行った。主な意見は次の通りである。

《ボランティアについて》

・市民交流館やまゆりで開かれた「ボランティア活動とは？」の講座にして思ったが、人によってボランティア活動の受けとめかたが異なること、交通費などの実費は頂きたいと思っている年金生活者もいる一方で、人との関わり合いを重視するシニア世代もいること、など人それぞれの思いがある。
・講座での、ボランティア活動の理由について「あなたがいるから私がいる」、「他人に心を寄せる」という話が印象に残った。ボランティア活動に関わるにあたって、肩ひじを張る必要はないということである。
・挨拶など、人との心を通わせることが大切。挨拶をきっかけに行動に移し、その積み重ねによって、それがグループとして組織的にボランティア活動に発展していくのではと考えている。
・多様な社会の中でも、同じ人間として差別なく暮らすことの重要性がボランティアの根底にある。
・ボランティアの数が不足しているので、小中高校の時代から溶け込めるように知る機会が必要だと思っている。現状はボランティアになる方の潜在人数が、まだまだ少ないと思う。
・行政などが募集している公共性の高いボランティア活動には、参加者がたくさん集まる。区役所・市民館等が絡んでいるボランティア活動と絡んでいいない活動では、ボランティアの集まり具合が異なる。
・ボランティアに参加しても長続きしない人もいる。これはボランティアの基本的なことを知らないからだと思う。このため、ボランティア基本的なことを知る機会が必要である。このため、社会福祉協議会では、ボランティア講座への参加を促している。
・先日やまゆりで開催された「ボランティア活動とは？」の講座では、人間関係が嫌だとやめてしまえば

よいと言われていたが、それが是か非かは、個人の判断によるものであると思う。しかし、できれば乗り越えて続けて欲しい。
・ボランティア行為は、自発的な心が大切であり、やむにやまれず突き動かされる心が大事である。このため、いろいろな人から湧き上がるので、きっかけやテーマは1人1人異なる。その心をどのように引き出し、人を増やしていくのかが課題である。
・行政のボランティア活動だから参加するのではなく、もっと大切なのは自分の自発的な心だと思う。心の動きの方が重要である。
・ボランティア活動を長続きするためには、ボランティア活動を自分のものとしていくことだと思う。ボランティア活動を、当事者として自らのものとしていく仕組みづくり。
・ボランティアになるためには、自分が犠牲になることだと思っていたが、やまゆりの講座で「自分のために」という視点、「自分のため」が「人のためにつながる」という考えを知り、意識が変わった。個人の犠牲の上で成り立つボランティアは長続きしないことが分かった。
・ボランティア活動に参加しやすい環境という導入部分では、区役所等の関わりや実費支給が必要だと思う。

《ボランティア活動について》
・活動に参加する上での条件やメリット等、外側だけの問題なのか。ボランティア活動へのきっかけとして、参加のハードルを下げるのも大切だが、その一歩先の問題があるのではないか。
・ボランティア活動を考える上で、プレイヤーとマネージメントという二つの視点がある。ある本ではボランティアとは創始者、中心的な存在の犠牲の上に成り立っているとの紹介があり、その言葉に深く共感している。
・ボランティアは目の前の問題をつい考えがちであるが、運営という点が欠落していることが多い。活動の継続という意味から「ボランティア性」に加え、「事業性」についても考える必要がある。
・「ボランティア活動とは？」の講座で言われていた、ボランティア活動は行政の肩代わりではないという話が印象に残っている。行政のボランティアへの関わり方、バランスが大切だと感じている。有償・無償に関わらないという点では地域通貨などが例として挙げられるのではないか。
・同じ意識の人が集まればグループ化され活動団体が生まれる。グループ化されることが望まれる。
・共育（ともいく）という言葉がある。行う側と受ける側が共に成長するという考えも必要。
・多くのグループが生まれれば、ボランティア活動に疲れたら別のグループに移ることができる。参加しやすくなる。そして、活動に関わる人が増えていく。
・交流館やまゆりでは、若い人が参加できるように７５歳の定年制をとっている。ビジネスとしてコミュニティの継続性を考えた場合、プレイヤー（現場で活動する人）からマネージャーを育てることが必要。
・市民館やまゆりでは、単純にボランティア参加を呼びかけるのではなく、定年後の生き方や仲間づくりに焦点を当てて呼びかけている。楽しいだけのボランティア参加は飽きられる。何をやりたいのか心から湧きあがるものが大切。
・寄付行為的な単発な活動は、ボランティアではないと思う。グループ化されたボランティア活動とは何か。
・アルテリッカでは若い人を対象に呼びかけ、約150人ものボランティアを集めているという成功事例もある。
・アルテリッカは、瞬間風速的（短期的）な要素が強いと思う。アルテリッカのボランティア活動は、内容が分かりやすいことや、講演を無料で見ることができるなど、参加のメリットが多い。
・ボランティアが長続きするためには、長期的な人間関係の煩わしさがないボランティア活動がよい。福祉関係のボランティアは、長期的な人間関係を必要とする上、何をやるのか外側からでは分かりにくいことがあり、なかなか参加者が集まらない原因だと思う。
・瞬間風速的（短期的）なボランティア活動を行った人がそのまま長期的なボランティアへのシフトにつながるとは言い難い。
・ボランティアが長続きするかどうかは、最終的には人間力だと思う。人間関係がストレスとなるか。それを乗り越えようとするのかは、各個人の問題だと思う。

・ボランティア活動が重荷となって離れていくことも多い。それを少なくするためにも、一緒に活動する仲間が必要である。
・ボランティア活動に参加する段階と、長期的にボランティア活動を継続させる段階では違いがある。短期的なボランティアを長期的なボランティアにつなげる仕組みが必要である。
・シニアの話が多いが、地域にはシニアと言い難い元気な高齢者もいる。具体的な絞り込みと方向性を。
・以前の話の中では中学生を地域の担い手にという話が出てきたが、イメージがわかない。
・実際、学校も地域へ生徒をボランティア活動に出している。
・活動を地域とつなげるという点では、地域のコーディネータが役割を果たすのではないか。地域教育会議が学校との地域をつなげる場でもある。
・学校のボランティアは、生徒に地域への関心を持ってもらうという、社会奉仕的、教育的な要素が強い。子どもたちに自発的にボランティアに参加したくなるように促すものとは違うと思う。
・ボランティアは、シニアだけが活動主体ではない。他の世代もボランティア活動に参加することで、様々なことを知ることができる。
・社会的に必要とされ活動しているが特定の人の負担が増えすぎてやめてしまうケースがあり、これにより消滅危機になっている団体がある。このため、運営員が不足していることなど、相談に応えてくれるところが必要である。今は、そのような相談に乗ってくれるところが少ない。
・短期のボランティア活動に参加した人やボランティア研修を受講した人が、次の活動につなげるきっかけづくりが重要である。

⇒次回の会議では、今回の審議内容や、ボランティアを多数集めた事例をまとめた資料を元に再度審議を深めることを確認した。